



ナビゲーション

——— 自立への道案内 ———



自立生活夢宙センターの平下さん、松倉さん、内村さんです。

もくじ

●「自立生活センター」(CIL)に来てみてや！ CILってこんな所で～す！第3回「自立生活夢宙センター」	2
●社会資源調査(居酒屋編)(山下大祐)	13
●連載エッセイ第2回(筒井純子)	14
●編集後記	16

エッセイ(第2回)

もはや、いつの間にか運動はライフワーク！？

筒井 純子

障害者運動と関わるきっかけ

小・中学校を養護学校で過ごした私は、全校生徒1000人以上の普通高校へ通うことになりました。1年の時は、何もかもが初めての経験で、みんなについていくのに必死だったので、う～ん？！正直あまり覚えていないのですが、書くのが遅く黒板の字を時間内では書けなくて、よくノートを借りていたことやみんなで弁当のおかずを替えっこしたこと、休み時間はよく図書室へ通っていたこと、などなど。クラブは、何故か演劇部と美術部に入っていたような？気がします。

コクトーやランボーの詩集を読み、言われることを忠実に守る、とにかく「勉強熱心」で「まじめ～な」高校生活を送っておりました。

転機は、2年の2学期に友人から「朝問研（朝鮮問題研究会）と一緒にやらない？」と誘われ、何をやるのかもわからないまま、ホイホイと付いて部室に入ったのが始まりでした。

そこで取り組まれていたのは、朝鮮文化や差別の実態を学び、在日韓国・朝鮮人生徒の本名を名乗る支援を行ったり、ハングル語の学習会などもやっていました。私は、何か強い力に引っ張られるようにどんどんのめり込んでいき、部落問題にも首を突っ込み、部落

差別に反対し、人権擁護などの集会にも参加していきました。校内では、制服反対運動や日の丸・君が代の強制に反対する活動などをやったものだから「生活指導」の教師に呼び出され、懇々と説教を受ける日々でした。それに加えて、「三里塚闘争（成田空港建設反対闘争）」に関わり、闘う農民と連帯するぞ！と集会やデモに参加し、はたまた安保反対を訴えるなど反戦・反核・反差別の運動に明け暮れていました。当時は学生運動や「新左翼運動」と呼ばれる活動が下火になっていましたが、まだまだ全国各地で組織化されていた時代です。私も少なからずその影響を受けた一人です。大げさではなく、「死」を身近に感じたこともありましたが、社会のあり方や理不尽さに対する怒りに突き動かされていました。

さて私は3年の3学期を迎え、大学か就職かの進路を突きつけられ、あんなに「勉強熱心」で「まじめ～な」私はどこへ行ってしまったんだ～！？状態だったので、とりあえず就職の道を選びました。この頃に当事者活動と出会い、障害者解放運動へと進んでいくことになります。

全障連の活動の中で大切にしてきた「想い」

就職の道を選んだ私は、障害者を別枠採用していた、NTT（当時、電電公社）を受け、一次試験には通ったものの二次の「適性試験（簡単な伝票計算や整理・荷物の持ち運び・電話応対等）」をやらされた結果、「職種がない」という理由で落とされました。

「職種がない」という理由に納得がいかなかった私は（というか、周りからも言われ）、当局に話し合いを申し入れたのです。話し合いの中で、職種も十分吟味したわけでもなく、できないことを前提にしていることが明らかになりました。また私には「4分の1の能力しかない」と言い放ち、実はこれが不採用の本当の理由だったのです。何と比べて「4分の1」なのか？について問いたしましたが、その答えを得ることはできませんでした。

「電電公社の就職差別と闘う会」が結成され、数年にわたって運動を展開しましたが、残念ながら私の就労は実現しませんでした。この話をすると長～くなるので止めますが、ただ私の後、障害者が数多く採用されており、この闘いも無駄ではなかったのかなあ、と思っています。

高校を卒業して1～2年後、一人暮らしを始め、在学中、ボランティアとして通っていた阿倍野にあったベビーセンターと子ども会でバイトをしながら運動を続け、その後東大阪で、学童保育の「指導員」として10年間働きました。この頃の話もしたいのですが、余裕があればということにさせていただきます。

当事者運動との出会いは折りしも、養護学校義務化が間近に迫り、各地で「義務化阻止共闘」が結成され精力的に運動が展開されていました。また、専門家や親が中心で発達保障論を盾に、養護学校や施設の建設を進めていた「全障研」の10周年記念大会が大阪で開催されるということで、それと真っ向から論破していった「全障連」の結成大会をこれにぶっつけようと準備していました。私は「阻止共闘」を一緒にやらないかと誘われ、これまたホイホイと関わっていき、全障連に入り、障害者運動が私のライフワークになっていきました。思えば、兄姉と同じ地域の学校へ行けなかったことも然り、在日や部落、三里塚などをやる中で、障害者差別と、そして自分自身とどう向き合うのか？と自問すれば、全障連は私にとって必然的なものでした。

障害からの解放ではなく、差別からの解放である。生きる主体は障害者本人である。どんなに重い障害があっても地域で当たり前暮らす共生共育の構築。能力主義・優生思想に反対し、反戦・反核・反天皇制・反差別の闘いを推し進め社会変革を目指す。これが全障連の思想性であり、私が大切にしてきた、大切にしていきたいことです。

ああ、何と云うことでしょう！今回も志半ばで終わることをお許してください。次回は「恋話（こいばな）」なども織り込みながら、完結していきたいと思いますので、ぜひ読んでくださいね！

「自立生活センター」(CIL)に来てみてや！CILってこんな所で～す！

第3回 「自立生活夢宙センター」

今年度のナビゲーションでは、各地の自立生活センター（CIL）を訪れセンターが出来るまでの背景や、事業の特徴などを伺い、情報として発信し、もっと地域の人達にCILの活動を知ってもらいたいと思っています。

今回は大阪市住之江区の「自立生活夢宙センター」を訪問しました。お話を伺ったのは代表の平下耕三さん、自立支援と生活介護のすぺーすしゃとるメンバーの活動のサポートをされておられる内村恵美さん、コーディネーターの松倉建次さんの3名です。

～はじめに～

松倉：自立生活センターの紹介やったっけ？

平下：各センターに紹介してもらって取材するってやつ？

足立：紹介という訳ではないんですけど。前までは自立記念日ということで、例えば夢宙センターの内村さんとか陶山さんとか個人を取材させてもらってたんですが、今回はセンターの取材ということで、センターに関するいろんな話を聴けたらいいなと思っています。

松崎：今回は3回目です。

平下：3番手かぁ…（笑）。

松崎：1番じゃなくて申し訳ないんですけど。夢宙センターさんが出来るまでの経過とか話しやすいところからお願いできますか。

南光：まず、自己紹介をお願いします。

平下：NPO法人自立生活夢宙センターの代表の平下です。

松倉：ヘルプセンターぴっとinで介護派遣事業をしています。コーディネーターしています。そんなに知られてないんですけど、肩書きは統括サービスマネージャーをしています。ジョニー松倉といいます。主な仕事はコーディネート業務です。

内村：女性の障害者の担当で自立支援と、生活介護のしゃとるメンバーの活動のサポートをしています。JILの中でユースパワーネットというのが出来たので、そこの活動もしています。



取材の様子

～夢宙センター立ち上げまで～

足立：では、夢宙センターが出来るまでを教えてください。

平下：昔、大阪市自立生活センター研究会という集まりがあって、そこに川嶋さんとか尾上さんとか全国の運動のリーダーが居てはった。そこで、俺は尾上さんの施設時代の後輩やから、そういう状況を知って参加した。その時にあるの東谷さんとも出会って、そこで研究会のメンバーとして2年ぐらい活動してた。ピア大阪で働くことになって、いろいろ活動する中で自分も自立生活センターを立ち上げたいと強く思うようになった。ピア大阪時代に、童夢KANSAIっていう障害者のレクリエーショングループを立ち上げて、そこで松倉とか兄貴（平下兄）とか他にも色々なメンバーが集まって毎月1回の活動をやってました。

夢宙立ち上げのきっかけで一番大きかったのはメインストリーム協会の廉田さんの言葉やったんやけど、前々からメインストリームのファンで、メインは障害者甲子園を実践してるどころやと知ってたから、自立生活センターとしては志を持ってやってるイメージを持っていた。そんな時、廉田さんと仲良くなって、童夢KANSAIの集まりに廉田さんと呼んだ。その時に言ってくれた印象的な言葉がある。「平下くん、人生1回きりやぞ、人を小手先で笑わすな。人生かけて笑わせろ」その言葉がすごく俺の背中を押してくれた。「そやなあ、今の自分は中途半端やな」と実感した。そこで新たに立ち上げて、自分のやり方でやれたらいいなって。「よし、やろう！」ということで準備会に仲間集めて松倉とか兄貴とかにラブコール送りながら一緒に加わってスタートしていったっていう経過です。

2001年に準備会を私が立ち上げてまして、毎月1回集まって勉強会、ピアカンの勉強会、講師を招いてのパワーアップ的な勉強会をしてました。1年後にセンターを立ち上げようということで、2002年3月に住之江の区民ホールで設立集会をやったんです。その時の当事者メンバーは俺と陶山だけやった。健常者は女性でじゅんちゃん（もげるの嫁）。それでスタートした。

～居場所、強さ、優しさ、仲間～

足立：夢宙センターで一番大事にしていることはありますか？

平下：夢宙センター立ち上げる時に自分はずっと思ってたんやけど、居場所っていうものを追求していきたいと思ってた。人は居場所が出来ると強くなれると思ってるから。居場所っていうのは安心できる場所であってそこに仲間がいるところであって、元気になれるところであって、センターやるんやったら、障害者も健常者も元気になれる場所が居場所なんかな、その居場所ができると自立生活にも繋がっていくと思うし運動にも力入れていけるし自分自身も強くなれるし高めていけるん違うんかなと。

そして仲間を大切にする優しさ。そういう強さを実感できることが大切。

アジアの障害者が研修に来た時に「夢宙センターはアットホームで、みんなが元気」とか言ってくれたりする。その時はもっともっと仲間を大切にせなアカンと思う。人が集まるところには、おもしろさがなかったらアカンのかなと。面白くないところに人は集まらないし。面白いところに人は集まってくると思う。そこにパワーがないと続かない。よく松倉がスイミーに例えて言うてくれるねんけど。

松倉：夢宙センターがどんなところかって例えたら、俺は知らないんやけど「スイミー」っていう本があるんですかね。小さい魚が集まって大きい魚みたいな影になって怖い魚を追い払う話。そういう感じなんかなっていうのがして。要は何が言いたいかっていうたら一人ひとりはそのんなに大したことないんよ。でも人が集まれば大きな力になって社会を変えられるんちゃうんかな。社会を変えるっていうのはどういうことかっていうたら「一人でも多くの自立を応援し、決めつけられた障害者観を一つひとつ見直していくこと。」だから、その目標に向かって、みんなが1つになっていかなアカン。そういう意味で、スイミーで例えた。というのがわかり易いかな。いろんな奴の力（個性）がいるっていうこと。



平下さん

～夢宙センターについて～

足立：「夢宙センター」という名前は誰が考えたんですか？

平下：『夢』という漢字が好きで宇宙の『宙』は無限大の可能性を持ってるというか、可能性にチャレンジしていく。夢に向かって夢中になってということで考えて付けました。キーワードは夢やな。

松崎：メンバーは何人ぐらいですか？

平下：NPO法人の夢宙センターはC I Lとヘルプセンター・ぴっとinと生活介護すぺーすしゃとるがあって、トータルしての当事者スタッフは6人。ヘルプセンターが8人。生活介護で常勤のスタッフは2人やから全部で16人。常勤ヘルパーとか特役ヘルパーとか入れたらもっと。常勤と特役ヘルパー入れたら何人になるんやったっけ？

松倉：全体のスタッフは39人。

南光：特役ヘルパーって？

松倉：まず、ぴっとinの介助者の体系を説明すると、コーディネーターがおって常勤・非常勤っていうのがおって、登録ヘルパー（学生とかパートとか他の仕事をしながらこっち手伝ってくれてる人達）が50、60人おる。うちの場合ちょっとだけ変わってるのが、常勤の位置づけは、ただ単に多くの時間数を入ってるだけじゃなくて、自立生活センターの介助者とは何か？を理解してもらうための研修もしてるんです。そこから、自立生活センターでの役割を担い、全ケースの利用者さんに介助者として入れる人達で、なおかつ研修ができて、次の人達に伝えていけるのが特役ヘルパーっていう人達。正式名称は特別役職ヘルパー。その役職っていうのは介助だけじゃない役割を持ってる人達という意味。介護は基本上手いけどイベントとかもしてる。介護8割、イベント2割ぐらいの人達が特役。エースという役職もあって、それは介護と内勤が半々か、内勤が主要っていう人達。常勤の人達は介護10割。

松崎：普通、自立生活センターと派遣事業所って完全に分かれてるじゃないですか。それが、ヘルパーさんも部分的に自立生活センターに関わるってことですか？

松倉：そうです。さっき言うたエースとかコーディネーターはNPO夢宙センターの健常者スタッフの位置づけなように、要のヘルパーは障害者に関わっていくことが多い。当事者活動に関わることで介助以外の役割を見つけていけるんやと思う。平下さんが、特役を連れていって東京行ったりして見せていくということが多い。

松崎：そういう仕組みでのメリットとデメリットを教えてください。

松倉：この形は2003年に僕が考えたんやけども、どうして作ろうと思ったかっていうたら、当時コーディネーターってどこまでやらなあかんねやろ〜ってずっと考えてた。そうしたら仕事が膨大になってきて、シフトから緊急や研修や調整とかたくさんあって、しんどくなってきたりコーディネーターが全国的に多くなって、間の人達がおったら楽になるのになって思ってた。この業界がそんなに好きでなかったら「金で雇われて現場だけでいい」って言うやろけど、ちょっと興味を持っている人は「ちょっと

こういう事務職やってくれへんかな？」とか「この人の介助上手いからマニュアル作ってくれへんかな？」って言うたら結構喜んで引き受けてくれる。そしたらどんどん楽になるし、利用者からしても一番慣れてる人が伝えていくという形がベストやと思うから、それはすごい良かったなと思います。

デメリットは、ピラミッドみたいになってしまう。「こいつらの方が偉い」とか、そういうのはひしひしと感じてる。「やりにくいなあ」と思う時がある。そうさせないためには常勤の位置づけというのがすごく大きくて。常勤さんっていうのは介助の仕事を実際にこなしてほしいけど、自立生活センターと骨の髄まで一緒にやっていこうっていう人達じゃないから。どっちかっていうたら気楽に一生懸命仕事をしてもらえたらいいですよ、みたいな。そんな人達がたくさんおって多くの自立障害者を生み出せていけるんやと思う。

常勤でも3, 4年やってて、こっち中心にやりたいっていう人が出てきてくれたら嬉しいな、っていう感じかな。こういう形は、悪い形じゃないと思ってる。それぞれ役割持ってるから。でも健常者を何にでも入れていくのは危険。

南光：健常者の立ち位置、役割で思うところがありますか？

松倉：健常者はフットワーク軽いから、「一緒にやりましょ」って言うたら、悪気なく仕事を取ってしまうところがある。障害者にしか出来ないところでも、知らぬ間に手を出していつてしまう。前に出る出ないっていうよりかは、この世界でアシスト役っていうのをしていかなと。知らない間に悪気なく健常者はいろいろしてしまう。



松倉さん

～障害者と健常者の協力関係が大事～

松倉：いまだに登録の人もあだ名付けてる。あだ名付けるのはこれからもやっていきたい。

あだ名つけてたら忘れへん。

南光：なんで松倉さんはジョニーになったん？

松倉：わからないんですよ。スナックのママにジョニーって言われて、それから。平下さん

のことを社長って呼んでるけど、別に夢宙センターの社長ちゃうからね。実は15年前からあだ名が社長やねん。

足立：あだ名っていうのは、他のセンターでもあまりない特色ですよ。

平下：障大連にも浸透していった。健常者も障害者もあだ名で呼んでる。優しさから面白さになる。

松倉：優しくしよう優しくなろうと思ってたら、ほんとに優しくなっていく。

平下：それが伝わっていったから仲良くなっていけてるのかな。

足立：ちょっともめ事が起きた時とか、何か心がけてることはありますか？

平下：障害者や健常者ともお互い話をしていった。場合によっては、障害者と健常者を分けて話す時もある。介入はしてる。介入しないとえらいことになる。お客さんになってしまう、わがままを言うっていうかな。うちはお客さんを作らないようにしてる。お互いの協力関係っていうのは大事。噛み合っていく状況を作っていかなと。ある程度それ出来るのは生活介護のメンバー。

松崎：ヘルパーさんが日頃の活動に関わってるのは大きいですか？

松倉：この仕事が面白いとか、自立支援っていうのも当事者がやってる自立支援と健常者がやってる支援っていうのは、また違うねんけど、一緒に合わさって出来てるんやなって実感できたら面白いっていう人は何人かはおるんよね。中部さんにもおると思うけど。そこを感じるチャンスは作っていったらアカンのかなって思う。そこをやっていったら一生懸命頑張っても、一方的に利用者から嫌われたり、切られるっていうのはないかもしれへん。でも繋がり深くもっていったほうがいいと思う。そうした方が人との関係性を作るのが上手くなったりするのかなって感じはします。特役とか慣れてる人より新人の方が信頼するっていう障害者もおるし。毎日いろいろ変わったりするのはしんどいとは思いますが関係性を築いていくという点では重要やと思う。

内村：私は介助者が誰が来ても介助の指示を言えるっていう自信はあるから。たくさんの介助者が入って初めは伝えることがしんどいこともあるけど、慣れるとどんな人にでも伝えれる自信につながるし、介助者も利用者が変わっていく様子が見えると、関わっててうれしいと思う。

足立：自立の取り組み以外でしゃとるとセンターがリンクしている部分や関わりってあるんですか？

平下：1つは学校回り。小学校とか専門学校とか大学とか、うちのスタッフとしゃとるのメンバーと一緒に回る。自分史とか話してもらったりとか「ヘルパーになれへんか」とか勧誘みたいなものを定期的に行ってるねん。そこで、人前で喋られへんかったメンバーが自信持ったりとかっていう風な繋がりはあるな。

足立：学校回りで啓発活動みたいなのとヘルパー募集も並行してやってるんですね。

平下：そうそう。障害の理解とか。それをうちのスタッフだけじゃなくてメンバーも入れて

「メンバーの1日」っていうDVDを作った。一人ひとりのDVDがあるねん。全員分じゃないけど、ほとんどの人ののはある。

内村：最近自立した人のはないけど。自立して何年か経つ人のはある。

平下：それを流しながら喋ってもらったりとかしてる。



～自立への積極的な取り組み～

足立：これまでの自立取り組みについて教えてください。

平下：馬渡の自立支援は不安やった。なんせセンター立ちあがってすぐやったからなあ。出来るんかなあって。みんなで取り掛かって出来て、それが自信になった。ある頸損のAさんとの出会いも大きかった。彼の自立支援に関わったから、とにかく自立障害者を生み出すことが優先順位でもってこれたんかな。本来そうやねんで、自立生活センターっていうのは。自立障害者の実態を作るっていうのが一番大事なんちゃうんかなと思って。内村も施設の後輩で、施設の職員から紹介された。その頃は自立してなかったし親と暮らしてたし。

内村：家出たい気持ちはあったけど、一般就労してたら仕事が忙しくて、仕事も自分のことも出来へんわと諦めてきてて、それで夢宙センターと関わって一人暮らし出来るのがわかって、でも夢宙センターと関わって1年間出る気配もなく。夢宙センターに来て半年ぐらいの時に「1年の間に出来ます」っていうたけど、そっから結局1年近くなかなか出れず。もうボチボチ1年になると思って焦って出たって感じ。不安はあったかな。（自立した人は）周りにいてるけど、実際自分がやるとなると不安やった。ギリギリ1年で出た。

松崎：今まで何人のメンバーが自立したんですか？

平下：25、6人かな。毎年2、3人ペースでやってきたから。

南光：最初は馬渡さん？

平下：そう。

松倉：関わったのはAさんが早かったけど最初に自立したのは馬渡さん。

平下：Aさんは東谷さんから相談受けて夢宙センターと関わって。17年間、家からほとんど出たことがない。何で17年寝たきりやったかっていうたら、おかあちゃんが病院から引き取るって言うたんよ。本人はリハビリセンター行く言うててんけど、おかあちゃんが引き取るいうて、おかあちゃんが17年世話してて、おかあちゃんが死んで兄弟達が「施設に入れる」って言うて本人がどうしようってなって東谷さんにSOSを出した。それで夢宙センターに繋がった。俺らは、じゃILPとしてピア大阪で電動車いすを貸してくれるっていうたから、そこで練習できるようにしようかってなって。練習する日に家からピア大阪向かう時に俺と松倉とで行って、俺が運転して連れて行った時、車から外の景色を見たAさんが「ずいぶんと景色は変わったな。俺も変わるかな。俺このままやったら嫌やねん。施設行きたくない」って言うて。「施設に行かすかいな」って思ったし、これこそ自立生活センターなんやなっていうのを彼の自立の応援を通して実感したというか、「厳しい状況にある仲間が自立していくことを応援していくのが自立生活センターの役割なんや」という風に自分が実感した。ここで彼を施設に入れてたら俺らは何のためにおるんやろ、みたいな。そういう出会いがあって実践していく中で学ばせていってもらった。そこで、ヘルパーも4、5人しかおらんかった。そこで「やろう」って言うたのは松倉やった。その時「無理ですよ」って言われてたらわからなかった。そこで「やろう」って言うてくれたから事務所帰ってみんなにも話して、みんなも「やろう」って言うてくれた。それを「そんなん無理や」言われてたら、どうなってたんやろって思う。それだけ熱い思いを伝えていけば、それが伝わればみんなの気持ちが1つになる。夢宙センターは、一人ひとりの個性を大事にしてる。個性を伸ばすためには認めてあげないとアカン。その結果、バンドとかを作ったり、劇団作ったりクラブ作ったり、そのためにシフト空けたり。クラブは沢山あって、10ぐらいある。宇宙、麻雀、ラーメン、大富豪、うどん、野球、フットサル、バスケ、写真、ポケモン部もある。バンドは4つぐらいある。

松崎：そこに特役も関わってるからシフトを組むのが大変になる？

平下：そう。常勤も関わってる。

足立：でもそれが仕事以外でのつながり、仲間作りになりますよね。

松倉：自分でワンマンでやろうと思ったら絶対にしんどくなるから。皆、特性があって、介助は下手やけど他のことはうまいとか。工場とかで働いてたら面白さはいらんと思うけど、センターで働いてたら、どっか面白いことないかな。とか考えたりするし。

南光：自立の取り組みをしていく中で一番難しかったことや困ったことは？

平下：自立って支援の中で、大きく分けて2つのタイプがあると思うんですけど、緊急タイプと親子依存型。緊急タイプは、ある程度スムーズにいく。こちら側の体制さえ整えたらスムーズに進む。でも親子依存型っていうのは、ずっと関わってても当事者より

も親が強敵かな。大変やなっていうのは、本人が40歳超えてても子ども扱いですからね。親が本人を諦めさせてしまう。

南光：そうやねえ。

平下：障害者だけに言えたことじゃないと思う。健常者でもそうやけど大人になってもすぐに家を出ないじゃないですか。俺は自立っていうのは親からの独立やと思ってるから、結局は、最終的には本人の強い意志が固まらないと。そこを背中押していく中で男性は進んでいくんですよ。女性はなかなか難しい。

内村：ピアカンとかもしてるけど、親が色々言ってきて。

平下：親とも話するけど。喧嘩になったりして離れていく。支援学校からの実習で作業所に来るけど、夢宙センターは自立生活センターやから「自立への話をします。」っていう。そうすると、よくよく考えて他のところに決まりましたとか。去年やっとな高校と支援学校からきた障害者がおって「どうしようか」とみんなで話し合った結果、受け入れるけど親を呼んで面談して、「20歳までに自立を目指していこう」ということを本人と親に確認して。それで「やる」ってなって、それでメンバーになって来年には自立しなアカンわけ。自立しようとする障害者をスタッフと自立メンバーとチカラを合わせてILPをやろうとしてるところ。そこが今、うちで一番力を入れていこうかなっていうところかな。

松崎：さっき女性が親元から自立するのは大変っていう話がありましたが、以前にグループホームも自立の弊害になると、お聞きしたことあるんですが。

平下：うちもグループホームから自立する人も何人か居てた。ある福祉ホームは3年っていうルールはあるけど。期限やルールがあれば選択肢の1つでもあるんかなあ、とは思う。今は重複の人も多いし、そういうルールに関しては人それぞれやと思う。でも、身体だけやったらグループホームを経由せずに自立できるんちゃうか？と思う。



～自立に対する考え方の変化～

南光：昔、自立した人達はなんとか自分の生活を変えたいっていう気持ちで自立する人が多

かったと思うんやけど、今は家におってもヘルパー使えるし、作業所行けるし、街もバリアフリー進んできて、そこそこの生活は出来るようになってきてるやんか。だから、そこで満足してしまって自分からどうしても自立したいっていうそういう気持ちはなかなか出てこない障害者が僕の周りで結構おる。そういうこと感じたことないですか？

平下: そりゃありますよ。青い芝の人達は施設から出て、自分達の生活を変えとかいう形で介助者も居ない中でとにかく出てみたいなところから始まったんですよ。生活を切り開いていく根性があった。強さみたいなんあったじゃないですか。本当にそう考えたら今は弱いところもあると思いますよね。現状のまま、全然そこにおさまってるみたいな。

南光: その一方で、いくとこまでいって、本当にどうしようもなく、なんとなく自立するっていうケースもあるんですわ。

平下: 安易っていう意味？

南光: 言い方悪いかもしれへんけど、昔やったら支援センターがないし、制度的にもほとんどなかったから施設に行かざるを得なかった。そういう人でも今やったら支援センターと関わってって生活が出来たら自立に繋がっていくやんか。それで本当にいいのかなあって思う。

内村: 夢宙センターでは、自立したいけど親との関係で自立できない。というケースがある。本人は自立したい気持ちはあるけど、親が反対しててなかなか出れないっていうケースがありますね。

平下: 昔の先輩方が施設に入らざるを得ない環境にあった時代、最重度の人たちは親亡きあと施設に入れられるっていう歴史が繰り返されてきたわけじゃないですか。俺らはその流れを変えていこうとしてるわけじゃないですか。今さっきうちの若いメンバーの話したと思うんですけど、やっぱり親が元気なうちに自立出来る実態作りって大事なんちゃうんかなあ、って思います。40、50歳のメンバーが皆、いつも言ってるのは「もっと若いうちに自立をしたかった。ほんまやったら20代ぐらいで自立したかった。だけど環境とか制度の不十分で出来なかった。だからこそ今は若い人達が親が元気なうちに自立してほしい」ってね。そうやなって思いますけどね。そこをどう伝えても若い人達はピンとこない、っていう部分が多いじゃないですか。

足立: 施設には行きたくないけど、実家暮らしを続けられるうちはできる限り続けたい、それが難しくなったら自立する、とか。

平下: 自分から動けへん、自分から苦労しないってことかな。俺もおっさんになってきたからわからへん。

南光: 夢宙センターでは、そんな感じの人は居ないのかな？

平下: 切迫感がないっていうことですよ。

内村: イメージが付かないっていうのもあるんかなあ。気持ちが高まっていけないんかなあ。とか。

～アジア支援を通じて感じるもの～

松崎: 海外の研修生を受け入れるきっかけは何だったんですか？

平下:メインストリーム協会からアジアの研修生受け入れへんかあ?って言われて。受け入れたら面白いし、仲良くもなれたしいろんな関係性も出来てくるから面白いと思うようになった。

内村:南光さんも言うてたけど、昔の障害者は自分の生活変えたいと思って出た。今やったら制度も整って、街にもある程度出れて、夢宙センターに来るまで運動なんて全く考えてなかったし、自分は仕事して実家でやけど生活出来てたし、それで普通と思ってて今の若い子と同じ考えやったと思う。アジアに行って日本との環境が全く違うからビックリしてショックやって、こんなとこやったら、絶対生活出来へんやろなと思って。変えていかなアカン大切さを感じたんですよ。だから運動していかなアカンって意識持ったのはアジアっていうのが自分の中ですごい響いたっていうか、日本に知らんとずっとおったら夢宙センターにいっぱい伝えてもらったけど、ピンときてなかった。伝えてきてもらってアジアに行って、全然環境が違うところへ行ったらすごいドンと自分の中に入ってきた、って感じ。アジアの当事者はパワーあるなとは思ってたんやけど。

足立:アジアの障害者との関わりについては、

今後何かありますか？

平下:若いスタッフが2月にダスキンの研修生

で2ヶ月ぐらいきたりするんやけど、それは継続してチカラを入れていきたい。これを受けたことによって受け入れたり向こうに行ったりして、そこで当事者も健常者もエンパワーしていけたらいいんちゃうんかなあ。そういう意味でアジアの活動っていうのはこれからも広げていきたい。2ヶ月受け入れてるから、またよろしくお願いします。



内村さん

～これから～

足立：これからの夢宙センターについて聞かせてください。

平下：今、良い形が出来つつあるから、それを伸ばしていくには、自立障害者をこれからも増やしていきたい。やっぱり、さっきの話じゃないけど、IL運動に出会えて

自分が変わったし、志をもって最後までやれる業界だと思ってるし、この運動をしていきたいと思ってるから、運動を実感してくれる若い障害者や健常者とかそういう人が増えていてくれたらいいなと思ってる。そういうセンターでありたいなと思います。

南光：運動に関しては今までのやり方に加えてこんな風にしていきたいとかありますか？

平下：いろんな方面での仕掛けっていうのは作っていかないと今までの流れの運動だけだと弱まっていってしまうのかなあ。市民運動じゃないけど、そういう風に繋げていくっていう部分。いまタイムリーでいったらタイガーマスク運動みたいな（笑）。ごっつい取り上げられてるやんか（笑）。そのためには、もっと障害者のいろんな角度から障害者観を変えていかなアカンのかなあ。もっと、障害者が社会に出ていくべきやな。

松崎：行政に声を挙げていくだけじゃなくて、もちろんそれも大事なんやけど、それプラス何かが必要ってことですね。

平下：色んなアンテナとチャンネルをもって仕掛けとして何か出来るん違うのかなあと思ってる。アレンジしながら。そういうのも必要なところは出てくると思う。

松崎：今日はお忙しい中ありがとうございました。

社会資源情報

居酒屋編

2月24日（木）南光、山下で駒川中野・針中野周辺で居酒屋探しをしました。いくつかお店はありましたが、段差があったり入り口の幅が狭かったりして入れるお店を探すのに苦労しました。余談ですが、駒川商店街に美粧館（美容院）が駒川中野店と針中野店2つありました。結局、リオの近くにある串かつ料理の店一寸法師に入りました。

<串かつ料理の店 一寸法師>

入り口————— 手動

店内————— カウンターとテーブル席がある。左側にカウンター。右側にテーブル席3つ。

4人がけ。車いす2台。頑張ったら3台入れるか?! カウンターとテーブルの間の通路が狭い。

店員の対応 他— 南光（電動）、山下（手動）が入店した時は、他にお客は居なく店員がテーブルを移動させてくれて通りやすくしてくれた。店員の対応は良かった。他にも障害者が食べに来ることがあるとのこと。（リオメンバー 他???)

店を出る際に他のお客に椅子やテーブルを動かしてもらった。ずいぶんよく気付いてくれる&慣れた動きをしていた。推測するに介護の仕事をしている人か?（なんの根拠もないが・・・。）



編集後記

東北関東大地震で被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を願っております。

あの地震以降、色んな場面で『自分には何が出来るのか?』をよく考えます。小さいことでも自分に出来ることを探したいというのが率直な思いです!「のど元過ぎれば熱さ忘れる」ではなく常に意識をしておく必要があるなと感じています。ナビゲーションでももっと色んな情報を掲載していかなアカンなと思う出来事です。
(こつぽ)

みなさんこんにちは。今回のナビゲーションでは自立生活夢宙センターへ取材に行かせていただきました。事務所の広さにビックリ!!迷ってしまいそうです。話を聴いていて、理念にしている『ひとりじゃない 仲間がいるから 強くも 優しくも 楽しくもできるんだ!!』という気持ちが、すごく伝わってきました。

さてさて、昨年末から寒い日が続いていますねえ。大晦日から元旦にかけては特に寒かったです。2月には大阪も3年ぶりに雪が降り積もりました。少しの積雪でも、めったに降らない地域にとっては交通機関が乱れたりして大混乱になりますよね。「春が待ち遠しい〜♪」 (やました)

▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽

自立生活センターナビとは…

☆ 私たちの考える「自立」は…

働いてお金を稼ぐ事や身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でしょうか?もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えられないときには仲間にサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」に色々な方法でお手伝いしていきたいと考えています。

☆ 地域で障害者の自立を実現していくための「道案内(ナビゲーター)」として例えば「介護してくれる人を探しているんだけど?」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの?」そして「自立したいけど自分には無理かな?」

自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出かけた仲間と一緒に料理を造ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っていま

す。

発行

自立生活センター・ナビ

でんわ 06 (6760)2671

住所

〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8

ファックス 06 (6760)2672